

犬も猫も法律上は「モノ」という扱いに過ぎないが、飼い主にとってはかけがえのない「家族」である。それゆえに、その扱いは一筋縄ではいかない。もし面倒を見る人間がいなくなれば、その大事な「家族」はどうなるのか――。

入院生活で面倒が見られなくな  
自分の生活を切り詰めてペット  
引き取ろうにもマンションはペット  
って処分、  
診療代を捻出、  
トNG……

# 老親が溺愛した 「実家のペット」を どうする?

「家族の『眞』」と書かれていた  
60歳以上の4人に一人が  
70歳以上の4人に一人が  
60歳以上の3人に一人が

て いるらしい

「田舎のアパートで1人暮らしをしていた85歳女性の孤独死を取材しました。郵便受けからあふれる郵便物や、漂ってくる異臭に隣人が気づいて発見されたのですが、部屋の中では腐敗した女性の遺体の傍にガリガリにやせ細ったベットの大が横たわっていました。」

しかし必ずしも看取る側  
人間であるとは限らない。  
やベットとして飼われる  
の平均寿命は14歳2か月  
で伸びている。猫も13歳  
か月となっている(はず  
も13年調査)。生活環境や  
ペットフードの進化などに  
より、かつての2倍近く長  
生きするようになつたのだ。  
だからこそ、冒頭で紹介  
したような悲劇が次々と起

けど、離れて住む  
子供たちは引き取  
ってくれない。こ  
の子を遺して死ぬ  
わけにはいかない。

つい先日も、進行がんを患う80歳の女性が飼い犬を連れてやってきました。彼女は『15年一緒に暮らしてきたワンちゃんだ

件数は年々減り、  
しかし飼い主が先  
つたり、老人ホー  
て面倒を見られな  
りしてこちらに送  
るベットは後を絶

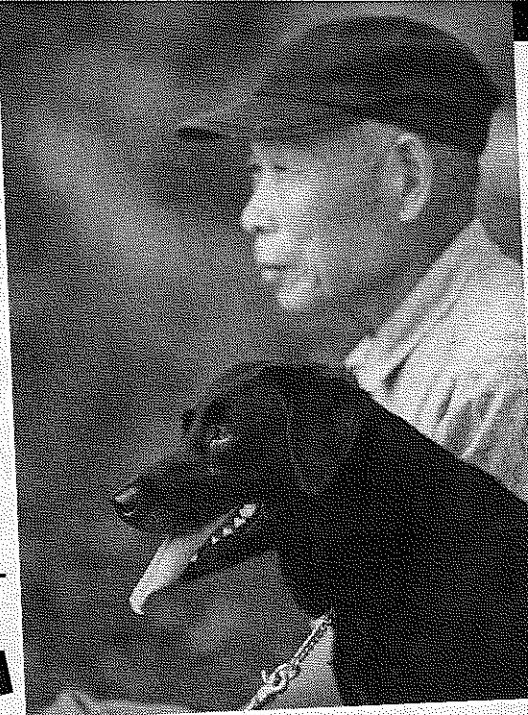
方のある自治体が  
動物愛護センター  
的な表情でこう打

い主の死や健康  
て、行き場がな  
まうペットが増

ペシムヤ「醍醐ヒ」スル

のない一家族』である実態  
がうかがえる。

54



老いた食い主のタマ儀鳳  
問題によつて、行き場がな  
くなつてしまふベットが増

くたさい」と涙ながらに訴えてきました。本来であれば、もつと新しい飼い主を

に小型犬を飼い始めました  
私が帰つてくると、本当に  
嬉しそうに尻尾を振つて迎

のない「家族」である実感がうかがえる。

以上の24・1%が犬や猫など何らかのペットを飼っているという。一方、65歳以上の単身高齢者の割合は増え続けている。高齢者人口に占める1人暮らしの割合は1980年には10・7%だったが、2010年には24・2%になった。

この犬はそれからもな  
くして殺処分となつた。  
「飼い主に先立たれたペツ  
ト」の処遇が社会問題にな  
っている。

と断わるべきところですが、その女性の事情を踏まえて引き受けました。犬はすべてを理解しているかのように、ずっと悲しげな表情を浮かべていましたね

せめて樂に死なせてあげて  
ください”と涙ながらに訴  
えてきました。本来であれ  
ば、もつと新しい飼い主を  
探し努力をしてください”

のない一家族である実態

54

ほほを足元にすり下ろす。そうした猫との「会話」が、最近では人と話すことでも少なくなった私の唯一の心の安らぎです」（都内在住の81歳男性）

老親が抱える孤独や寂しさを一番近くで癒やしてくれるペットの存在は何ものにも代えがたい。愛犬・愛猫に先立たれた飼い主たちの落胆は察するに余りある

「うちの7歳の猫は、普段は気まぐれで私のいうことは全て聞くかないんです  
が、お腹をすかせると、ゴロゴロと喉を鳴らしながら

つて、年に1度帰って来る  
かどうかの息子夫婦より、  
よっぽど心が通じ合ってる  
気がします。残りの人生、  
支えになるのはこの子(大)  
だけです」(山形県在住の79)

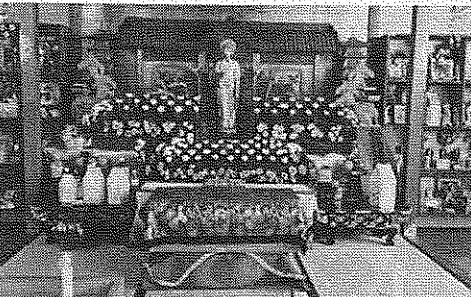
「夫が10年前に亡くなつてから、寂しさを埋めるために小型犬を飼い始めました。私が帰つてくると、本当に盛しそうに尻尾を振つて迎えてくれる。東京に出て行

## 「ペット相続」で兄弟断絶

飼い主が死んだり、世話をできなくなったりすれば、ペットの面倒を見るのは当然。しかし、生き物を飼うのに必要となる負担は生半可ではないし、様々なトラブルを引き起こす可能性もある。

不遇な犬の保護活動を行なっているNPO法人「Wonderful Dogs」の岩瀬友紀代表がいう。

「高齢の親が飼っていた場



犬の里親探し団体「Ley-Line」のイベント（共催はNPO法人「ペットライフネット」）



老犬ホームではペットの葬式も行なう（熊本県の老犬ホーム「トップ」提供）

合、犬や猫も年老いていることが多い。ペットは年齢を重ねるとそれまでのクセを矯正しにくく、引き取った家族が“嗜みついたりして手に負えない”と飼育を投げ出すケースが非常に多い。“親が大事にしていたペットだから”、“実家の犬は自分にも愛着がある。”と当初は引き受けても、5年、10年というスパンでみると、転勤や引っ越し、家族構成の変化などによって事情が変わり、面倒を見切れなくなってしまう事例はたくさんあります。

70代の母が入院し、実家で飼っていたシロという名の犬の処置に弱り果てました。我が家はマンションでペットはNGだし、持ち家のため引っ越しすることもできません。手を尽くしたが引き取り先も見つからなかつた。仕方なく、実家の近くの保健所に引き受けてもらいました。帰省するたびシロはどうしたの？」と聞かれて。“親切な人にもわかれていった”と嘘をついてしまった。後味は当然悪いですし、時々シロの顔が夢に出てくることもある」この男性は、今でも「本当に正しい決断だったのか」と悩み続けている。

悔が残る。

埼玉県在住の45歳会社員

## 老犬ホームは都内で「150万円」

ペットの悩みが増えてい るなかで、救いの手を差し伸べる動きもある。

有効活用したいのが自治体のサービスだ。千葉県の

「飼い主さがしの会」は、「ペットを飼えない」と「ペットが飼いたい」人をマッチングする行事を県内で月2回、開催している。

「飼い主さがしの会」は、「ペットを飼えない」と「ペットが飼いたい」人をマッチングする行事を県内で月2回、開催している。

あります」

大阪府在住の主婦・Aさ

ん（46）は、79歳の母が亡くなった後、兄の家族と「ペット相続」でもめた。

「不動産やお金などの遺産相続の話し合いは円満だったのに、実家の老犬の引き取りを巡っては大げんかになりました。兄は実家の近くに住んでいるのに、『飼えないから保健所に送る』と

当時は引き受けても、5年、10年というスパンでみると、転勤や引っ越し、家族構成の変化などによって事情が変わり、面倒を見切れなくなってしまう事例はたくさんあります。

都市部では、住宅事情がネックになる。住宅事情が「75歳の父が亡くなり、飼っていた猫は一人息子の私が面倒を見るしかなかった。ペットNGの賃貸マンションに住んでいたので隠れて飼っていたのですが、夜中に部屋を走り回る音で、階下の住人から管理会社に通報されてしまった。結局、3か月以内の退去を命じられ、泣く泣く引き越すことになりました。新居でも猫が壁や床をところ構わず爪でひつかくので、部屋がボロボロになっていく。敷

金返つてこないわよ」と、妻から睨まれる毎日です」（都内在住の39歳会社員）

「庭付き一戸建ての実家でのびのび暮らしていた犬だけたからか、狭いマンションが性に合わせずに昼夜かまわずキヤンキヤン吠え立てるようになつた。頭を抱えていたところ、同じマンションの住民から『騒音に対しかかるべき対策をとらなければ法的措置も辞さない』という通達の内容証明が届いたんです。結局、ドッグトレーナーに依頼して

金返つてこないわよ」と、妻から睨まれる毎日です」（都内在住の39歳会社員）

いう。私が文句をいうと“じやあお前が飼えよ。”と口をとがらせる。私は夫の両親と同居しているので、飼い犬がないのが本音でした。ですが、母の溺愛していた犬を殺すわけにはいかないし、他に引き取り手も見つからないので結局引き取りました。それ以来、兄とは顔を合わせたくもなくなってしまった

「かわいらしい新しい家族に娘たちをはじめ家族も最初は大喜びでしたが、環境の変化がストレスになったのか、半年もすると右後ろ足が腫れ上がってきた。慌てて獣医に連れて行くと

「悪性リンパ腫」との診断。

放射線治療や抗がん剤治療まで行ない、現在までに50万円以上をかけています。

ペットの治療代でボーナスがほとんど消えた。母が入居するホームの費用を毎月負担しているのに加え、娘の大学受験も控えている。

がほとんどの出費です」

「最悪の事態は『殺処分』だ。苦渋の選択とはいえ、申し込んだ側にも大きな後

心になりました」（都内在住、48歳男性）

「抱えていれば医療費もバカにならない。人間と違つて、犬や猫の診療には保険がきかないからだ。

都内在住の58歳会社員は、母親が認知症となり、施設に移る際に実家で飼っていたチワワを引き受けた。

「かわいらしく新しい家族に娘たちをはじめ家族も最初は大喜びでしたが、環境の変化がストレスになったのか、半年もすると右後ろ足が腫れ上がってきた。慌てて獣医に連れて行くと

「悪性リンパ腫」との診断。

放射線治療や抗がん剤治療まで行ない、現在までに50万円以上をかけています。

ペットの治療代でボーナスがほとんどの出費です」

「最悪の事態は『殺処分』だ。苦渋の選択とはいえ、申し込んだ側にも大きな後

心になりました」（都内在住、48歳男性）

「抱えていれば医療費もバカにならない。人間と違つて、犬や猫の診療には保険がきかないからだ。

都内在住の58歳会社員は、母親が認知症となり、施設に移る際に実家で飼っていたチワワを引き受けた。

「かわいらしく新しい家族に娘たちをはじめ家族も最初は大喜びでしたが、環境の変化がストレスになったのか、半年もすると右後ろ足が腫れ上がってきた。慌てて獣医に連れて行くと

「悪性リンパ腫」との診断。

放射線治療や抗がん剤治療まで行ない、現在までに50万円以上をかけています。

ペットの治療代でボーナスがほとんどの出費です」

「最悪の事態は『殺処分』だ。苦渋の選択とはいえ、申し込んだ側にも大きな後

心になりました」（都内在住、48歳男性）

「抱えていれば医療費もバカにならない。人間と違つて、犬や猫の診療には保険がきかないからだ。

都内在住の58歳会社員は、母親が認知症となり、施設に移る際に実家で飼っていたチワワを引き受けた。

「かわいらしく新しい家族に娘たちをはじめ家族も最初は大喜びでしたが、環境の変化がストレスになったのか、半年もすると右後ろ足が腫れ上がってきた。慌てて獣医に連れて行くと

「悪性リンパ腫」との診断。

放射線治療や抗がん剤治療まで行ない、現在までに50万円以上をかけています。

ペットの治療代でボーナスがほとんどの出費です」

「最悪の事態は『殺処分』だ。苦渋の選択とはいえ、申し込んだ側にも大きな後

心になりました」（都内在住、48歳男性）

「抱えていれば医療費もバカにならない。人間と違つて、犬や猫の診療には保険がきかないからだ。

都内在住の58歳会社員は、母親が認知症となり、施設に移る際に実家で飼っていたチワワを引き受けた。

「かわいらしく新しい家族に娘たちをはじめ家族も最初は大喜びでしたが、環境の変化がストレスになったのか、半年もすると右後ろ足が腫れ上がり、毎年返還する。死亡時だけではなく、高齢でペットの世話ができない場合でも、高齢でペットの世話を自ら担当してもらえるなど、多くの費用がかかるが、そのサポート体制は

ある以上、最後まで面倒を見れる責任が飼い主とその家族にある。「その時」に向けた準備も、もちろん責